

序にみえ

沈黙した諷諭

— 小川国夫 —

長 野 隆

——塗り絵をはじめたばかりの子供が、うずくまって何やら考えこんでいる。彼は、色の選択に迷っているのだ。パレットの中を覗いてみても、どこにもそれが見あたらない。

思考が既成のものでないことを、我々は文体と呼ぶ。彼の経験した初めての衝撃は、自己の文体の発見にすぎない。

文体がまさにそこにあるという事実を、我々は容易に明示することができない。文体を覗こうとすれば、速座に言葉は浮足たち、騒ぎはじめ、紙面の背後に隠れようとするだろう。文体を、産み、操ろうとする者の切なる試みは、いわばこの種の鬼ごっこに勝利することだ。追う者も逃げる者も彼自身である、という事実ほどけなげなことはない。かなしむべきは彼の不幸ではなく、彼の意欲そのものだ。

折り文脈の強さを
に(2)に4287
+は...

折り文脈の強さを
に(2)に4287
+は...

ここに*

と書いてある。

折り

小川国夫は、物語の創造力というものに不審をいだいた小説家の一人だ。彼の「表現というも
のに対する諦めは、他に類を見ない。そのうえで表現に向かい合うところに、彼の想像力は働き
つづけた。彼はむしろ愛するものに対して、孤独に禅を組み、祈りつづければよかった。誰も彼
を見る者がなければ、彼は幸福であった筈だ。しかるに彼が表現をものしたとき、彼は己が信
る愉しみを奪われる危惧を感じた。彼は心から畏怖したのである。
彼は言え、書くべきことは何もなかった。自己の裡を覗けば醒くほど、あの祈りにもまし
て自己を制圧し自己を魅了するものは何もなかった。ただあったのは、表現という魔物を手に、
己が秘密を他人に知らしめる禁忌に直面した不安と、高鳴る鼓動であった。彼が表現し得たの
はそれだけであったし、またそれは彼にしかないものであった。
彼は、文章の活々とした脈絡を好まない。それがみずから活動し、みずから生成することを嫌
う。活きたるものは常に醜い。彼にとってこの醜さは、自己そのものにかかわる問題であったか
ら。彼は文脈に沈黙を求めた。例の得体の知れぬ不安と高鳴りに対し、列を整え、額突くことを
強いた。「折り」はあくまで静謐に、そして重くあるべきであった。

スの人とーての

彼は独房に微光が来ると起きて、ゆかに指でなにか書いていた。

いつの間にか夜は明け放たれていた。兵隊が来た。そして、一人が、うずくまっている彼に——起て、
といった。

彼が立ち上ると、兵隊は彼の足元にしゃがんだ。足枷をはめるのだ。はめ終ると、兵隊は剣を抜いて、彼の両足の親指の爪をはがした。その日の最初の血が流れた。血は廊下の灰色の石の上では黒っぽかった。そして監獄の門のひなたでは赤かった。つめかけた群衆は静まった。

——「枯木」——

イエス（彼）が人であってはなるまい。しかし「彼」は人の手にかかり、人の血を流した。聖なる人のいたみは、ひたすら静まりかえっている。

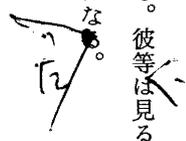
はみ

小川国夫は無言これを描こうとはしなかった。表現に合掌を強いてだけである。

*

はみ
の

——子供が向かいあって、あやとりをしている。彼等は見ることのできない空間に形を求めている。手にした形は、ほんの一瞬彼のものになる。



いふまでもなく

下をさうく

さういふ
意味はない

五七理の

諷諭や戯画は、それ本来、向かうべき対象をもっている。しかし、対象に実体を与えなければ、その表現は存在しない。しかも、見るものもなく、描くものもないことに意味を見出したとすれば、表現は、この不確かな意味を支えるために、自己に向かって呪文を唱え、重い沈黙に走るしかない。

小川国夫は、いつもそのまじか書かすいなのである。

一字一語の
重なり

五六、八、六